

氏名(生年月日)	武 市 綾
本 籍	
学位の種類	博士(医学)
学位授与の番号	乙第 2265 号
学位授与の日付	平成 16 年 5 月 28 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	アンケート調査による胃癌幽門側胃切除術, Billroth-I(B-I)法再建後の Quality of Life (QOL)
主論文公表誌	東京女子医科大学雑誌 第 73 巻 第 11 号 450-456 頁 2003 年
論文審査委員	(主査) 教授 高崎 健 (副査) 教授 亀岡 信悟, 太田 博明

論文内容の要旨

〔目的〕

近年,胃癌の術後生存率は手術法の改善,早期発見例の増加によって向上し,胃癌術後の長期生存例が多くなっている。したがって胃癌手術における治療効果の評価は,従来の術後生存率だけでなく術後の生活状況(QOL)を加味して行うことが必要とされてきている。

現在,胃癌に対し標準手術として最も多く行われているのは D2 郭清を伴う幽門側胃切除術, Billroth I 法(B-I 法)再建である。しかし, D2 郭清を伴う幽門側胃切除術, B-I 法再建の術後 QOL について, 術後長期経過例を含む多数例を対象にアンケート調査を行い明らかとした報告は意外にも少ない。また, 最近では術後 QOL 改善のための神経温存術式や縮小手術が検討され始めたが, その評価のためにも標準的に行われている D2 を伴う幽門側胃切除術, B-I 法再建の術後 QOL を明確にしておく必要がある。そこで, 本手術が行われた患者の術後 QOL についてアンケートにより調査, 検討した。

〔対象および方法〕

1984 年 1 月から 2001 年 6 月までの間に胃癌に対して D2 郭清を伴う幽門側胃切除術, B-I 法再建が行われ, 2002 年 7 月の時点で無再発生存である 736 症例にアンケートを送付し, 回答が得られた 580 症例を対象とした。

〔結果〕

生活状況では良好あるいは普通との回答が 94.4% に得られた。食事状況では 1 回食事量の減少が 61.1% において認められた。現在の体重では術前体重より減少した症例は 71.5% であった。早期ダンピング症状は 34.1%, 晩期ダンピング症状は 19.3%, 食道逆流症状は 31.2% に存在していた。また術後愁訴の経時的変化においては, 1 回食事量, 術後体重は長期経過とともに回復しているがその速度は遅く, またダンピング症状, 食道逆流症状は術後 1 年以降ほぼ改善しないという結果を得た。

〔考察〕

今回のアンケート調査で, 生活状況は良好あるいは普通との回答が 94.1% に得られた。しかし, 幽門側胃切除術, B-I 再建は, 食事状況の悪化と体重減少が多くの症例で発生し, ダンピング症状や食道への逆流症状も少なくない術式であることが判明した。さらに, それらの愁訴は術後期間が長くなっても改善する傾向は認められず, 考える以上に術後の QOL は不良と結論せざるを得ない成績である。

最近では術後の QOL を考慮して様々な術式や再建法が試みられてきている。いずれの術式もその評価には, 今回と同じような項目のアンケート調査が必要で, その際, 本研究で明らかとなった幽門側胃切除術, B-I 再建の術後 QOL がその基準になりうると考えられる。

〔結論〕

胃癌に対する幽門側胃切除術，B-I 再建は術後愁訴の多い術式と結論せざるを得ない．外科医は患者が胃痛を根治し通常の生活を送っていることに満足することなく，術後愁訴の少ない術式を今後とも工夫し，追求する必要がある．

論文審査の要旨

胃癌に対する幽門側胃切除はすでに 100 年を越える歴史のある術式であり，近年でも標準的術式として最も多く行われている．しかしながら早期診断が可能となった今日では長期の遠隔成績，特に QOL の確保が大きな問題となってきており，この面では再検討が必要であると考えられる．今回の検討はこのような観点での術後長期経過追求例についてアンケート調査を行っている．

結果としては長期遠隔時の QOL に関してはいろいろと問題があり，多くの方は手術を受けたのだから仕方がないとあきらめている状況が推測された．いまさらこのような検討が必要かとの意見もあるようだが，どのように完成された処置であると思われても時代の変遷に合わせて再評価を忘れてはならないと思われ，その意味でも評価に値する論文である．